

『抵抗の文学——国民革命軍將校阿權あろうの文学と生涯』要約

本論は現代中国における特異な文学者阿權に関する世界初となる評伝である。阿權（本名陳守梅）は抗日戦争から内戦の時代にかけて、亦門、「S. M.」、師牧、張懷瑞など二十を超える筆名を駆使して、変幻自在な姿で活躍した文学者であった。阿權は日中戦争における南京陥落の状況を、中国人として初めて長編小説に書きあげて発表した作家であり、優れた感性と鋭敏な理論で中国現代詩を豊かにした詩人である。当然その名は中国現代文学史に記憶されなければならないはずだったが、一九八〇年に至るまで、その業績は中華人民共和国の歴史から完全に抹消されていた。近年のインターネット上に阿權の純朴で繊細な愛の詩が、原作者の出自などに触れないままアップロードされているのだが、もちろん阿權が緻密で膨大な詩論と文芸評論によって一九四〇年代の詩的空白を埋める業績を上げていたことなど、中国人のほとんどが知らない。それはこれまで阿權が「胡風反革命集団の恐るべき中心人物」として断罪され、その「極悪非道な罪状」が中国現代史に黒々と書き込まれていたからである。公安警察による逮捕は一九五五年五月、阿權が四十八歳になる時で、その後は完全に執筆の自由を奪われ、天津監獄から一度も釈放されることなく、獄中で還暦を迎えた年に亡くなった。死後十余年、一九八〇年代になって阿權の追悼会が開かれ、その「犯罪者」としての悪名が名誉回復によって雪がれたのではあるが、彼の思想や文学までも含めた完全な復活がなされたとは言い難い。阿權の獄死が意味している真実は何か、この問いに答えられない限り彼の業績に対する正当な評価はあり得ないし、その人格に対する真摯な尊敬は成立し得ない。この意味で本論は、阿權に対する正当な評価の基礎となるものと言える。

「胡風反革命集団事件」とは、人民共和国建国数年にして起こった大規模な冤罪事件である。この時著名な文芸思想家・評論家・ジャーナリスト胡風（本名張光人）を中心とする文学者や知識人、その同調者たちが「胡風反革命集団」として一斉に検挙された。これは大きな衝撃を与える事件だったが、中国の決定に疑念を持つ論者はほとんどなく、中国共産党による断罪がそのまま受け入れられて、日本での研究からも胡風とその「グループ」の名前は消えていった。阿權はこのときの「胡風集団」の「骨幹分子」であり、実刑判決によって収監された三名のうちの一人だった。阿權は節を曲げることなく監獄で死を迎えたのだが、そこには個人の思想自体が国家に対する犯罪として裁かれ、創作と表現の自由が権力構造のなかで圧殺されていく姿が無残に物語られている。阿權の人生と文学の真実に接近し、その業績を詳細に検討することは、単に「胡風反革命集団」の事件が冤罪だったという再評価の問題に留まらず、文学と政治、文学と権力、文学と社会の根源的命題を深く掘り下げることに他ならない。またそれは中国という特殊状況下の文学の形態を論ずる学術的興味をはるかに超え、同時代を生きるアジ

アの、日本の文学者としての姿勢をも問うことになっていこう。ここに中国現代文学研究の大きな問題が潜んでいるのである。本論はこうした立場から、胡風とその仲間たちの巻き込まれた事件を阿壠に焦点を当てながら解析し、新たな研究の領野を切り開くものである。

中国現代史の研究においては胡風批判を毛沢東による文芸統制の山場として考え、その時期に至るさまざまな事件を、一九三六年の魯迅を巻き込んだ論争以来一貫した布石と見なすことが多い。三〇年代からの長い対立抗争の潮流において「胡風集団(胡風派) (胡風グループ)」が、最終的に追い落とされる道程と見ているのである。しかしこうした観点を成立させるには、文芸上のグループとして「胡風集団」とか「胡風派」とかいうセクトが存在していることを前提としなければならぬ。本論では、阿壠の生涯と作品を追いながら、こうしたセクトが存在していなかったことを明らかにする。「胡風集団」という概念は一九五五年の「胡風反革命集団事件」に由来するもので、国家権力が彼らを犯罪者として摘発する際に使用した仰々しい言葉であることを忘れてはならない。後にこの事件が完全な冤罪であることは内外に公表され、告発された「犯人」に対しては国家としての賠償が、限定された内容であるにしろ行われている。「集団」を構成する認定根拠が消滅しているのに、なおセクト・潮流として文学史を組み立てるのはあまりに政治的であり、妥当性に欠ける態度といわねばならない。

胡風は何よりも文芸思想家であり、文芸雑誌編集を自己の掲げる理念実現のための必須の運動形態として考え、多くの刊行物を周到にそして忍耐強く世に送り出したすぐれた組織者だった。胡風は中国を覆う抑圧に対して熱い抵抗の心がある芸術家なら、どのような人でも受け入れて発表の機会を保障してきた。その結果実に多くの文学者の作品が紹介されており、新進の詩人や作家たちにとって胡風は頼もしい先輩だったし、すでに名を成した文人たちからも、時に胡風の激しやうい論争的になってしまふことがあつたとしても、雑誌編集者として常に変わらぬ厚い信任が寄せられていたのである。そして重要な点は、胡風自身の考え方が共産党中央の思想に相当程度近かつたことである。胡風は毛沢東や周恩来が自分の文芸思想をよく理解してくれるものと完全に信じ切っていた。しかしながら、胡風の名声と編集者としての組織力を頼って胡風の雑誌に投稿していた文学者たちは必ずしも同じ立場ではなく、中国の現状を憂う心情は共有してはいても、思想の階梯から表現の方法まで多くのレベルがあり、まさに百花繚乱、自由で活発な出版が行われていたのだ。こういう文学者たちを一様に「胡風派」としてしまふのは、乱暴以外の何物でもない。

胡風事件の起こつた一九五〇年代は、新しい中国の明確な国家意識が社会各領域に大きく拡張していく時代だった。その意味で胡風事件は文化、思想・言論の世界における先鋭化した国家意識の現われと見ることでできよう。阿壠批判は胡風事件に先立って一九五〇年に開始されており、この年は、実に多様な論争が一気に繰り広げられた一年だったのである。現時点で振り返ってみると、こうした文化言論領域に対する全面的かつ迅速な思想動員の展開は、中国における新国家確立への不可避の道程だった。阿壠に対する批判はこうした思想動員・批判運動

のモデルケース的な役割を果たしたと思える。胡風に対する批判運動は阿壠批判に続いていくし、一九五五年の胡風事件、一九五七年の反右派闘争など陸続として準備された大きな粛清は、あたかも阿壠批判が撃鉄として機能したかのようだ。阿壠批判は中国が国家として確立していく過程で、権力の自己増殖と強化のために、思想言論の領域に放たれた火矢だった。問題は、一九五〇年という時間である。それは中国に新たな政治権力が国家を形成する極めて重要な時期だった。そしてそのためには、言論思想の世界に対して、徹底的かつ効果的な統制が求められていたということである。文学者間の一九三〇年代からの古き確執が、政権の誕生時に一気に拡大したのではなく、その時代の国家的統制の要請が自由な文芸の土壌を覆っていったとみるべきだろう。胡風事件という劇的展開がなかったとしても、形を変えた抑制が文芸界を襲っていたことは間違いないことである。本論では入手し得る資料を駆使しながら、批判運動の展開に秘められた、こうした国家意識の問題と個人の創作の関係を跡付けていく。

しかしながら阿壠に関する研究が、こうした複雑な背景のもとで遅々として進まなかった事は間違いない。本論の依拠する基本的資料といっても、まず阿壠に関する全集自体現段階では果たされてなく(信頼できる筋によると二〇一七年阿壠没後五十年を記念して刊行される予定)、断続的に刊行された幾つかのアンソロジーに頼るしかなく、一九四〇年代中国の詩論としては最大規模となる大著「詩与現実」も絶版されたままで、現在はエッセンスをまとめた評論集が刊行されているのみである。このほかには、『新文学史料』(一九九一年二期、二〇〇一年二期)掲載の阿壠略年表および阿壠に関する回想、『胡風回想録』『我与胡風』など胡風事件関連の回想録に含まれる阿壠記述などに当たっていくほかないのだが、回想の中には現在の政治状況を反映して一部しか語られないものや、あえて遠回しに述べるものなどもあり、慎重な対応が求められた。しかしこれは阿壠の価値が認められていないという意味ではない。上述の全集は忍耐強い若手研究者によって進められているし、昨年は基本資料として価値の高い書簡集の刊行も丁寧な編集を経て行われた。阿壠の直筆原稿を含む原資料は、遺族からすでに北京魯迅博物館に委ねられて保管されており、閲覧にはかなりの不便が伴うとはいえ、研究調査のステージに乗ったと言っている。本論はこうした研究の展開を踏まえながら、実際の取材や提供された録音音源などに基づき、これまで語られることになかった阿壠の経歴の詳細について、出来る限り明らかにしたつもりである。それにしても基本資料中最も肝心な阿壠「檔案」や公安警察の資料は遺族にすら公開されていないので、当然ながら、明らかにすると言っても立証できる術が限られており、推論に頼らざるを得ない部分が相当残っている事は、筆者として大変遺憾である。

次に本論の構成を述べる。本論は全五章からなっている。第一章から第三章では、阿壠の人生を現在わかりうる資料と新たな証言をもとに跡付けていくのだが、これは前述のように想像以上に難しい検討だった。本論では第一章で阿壠の少年時代から国民革命軍軍将校となって、日

本との戦闘の最前線に派遣されるまでを再現する。阿壠は江南杭州の没落した家柄の出身で、少年時代には苦勞して働きながら文学に接近している。亡国の危機の自覚とともに青年時代を迎え、すぐ国民党に入党、左派「改組派」の活動家となって、やがて黄埔軍官学校第一〇期に合格し、若き青年将校として上海防衛戦に百名の兵を率いて出陣する。そして二か月余りの激戦の中で重傷を負って後方に撤退するのだが、その時に自らの見聞を基に長編小説「南京」に着手するのである。そのころ阿壠は共産党の延安と国民党の西安を行き来し、国民党軍将校の立場を利用しながら共産党へ重要機密を提供していた。この時期、胡風の雑誌を通して、阿壠の名は（この時代は様々な筆名を使い分けており、阿壠の名はまだ登場していないのだが）次第に広がっていた。

第二章では、阿壠が軍部において国民党軍参謀将校、国民党陸軍大学教官となって昇進しながら、独特の感性で優れた詩作を続け、文芸に対する考察を深めていく重慶時代を描く。この時代、阿壠は軍人としても格段にレベルを上げており、特に胡風とその友人たちとの交わりは一気に深まっていた。四川の重鎮、山岳都市重慶は中国の戦時首都であり、阿壠が駐屯していた頃は政治・経済・軍事はもとより、文化的にも中国の中心であり、非常に活発な大都会だった。このころ阿壠は軍務で成都にも長く滞在しているのだが、ここで十五歳も年下の女性と出会い、激しい恋愛を経て電撃的に結婚する。彼女は成都の名家出身の文学愛好者で、成熟した阿壠の人格に強い憧れを持っていたのだ。しかし陸軍大学に籍を置いていた阿壠は新婚生活を無味乾燥な軍宿舎で過ごすを得ず、文学少女だった新妻には辛い日々が始まる。そして日本との戦争に勝利する一九四五年八月、二人の間には男子が誕生するのだが、次第に感情的な悩みを深めていった若妻は、この乳呑児を残して突然自殺してしまう。阿壠は孤独の深い闇に突き落とされたような日々を送ることになり、複雑な関係の広がりの中で江南へ逃亡せざるを得なくなる。そしてその阿壠を追って軍部からの指名手配が行われるのだ。深い愛情とその劇的破綻、救国の情熱と現実への絶望、そのすべてを経て阿壠の文学は一種の凄味を帯びてくる。阿壠という筆名が使われ始めるのは、このころのことである。

第三章では人民共和国建国前夜から監獄での死に至るまでの阿壠に焦点を当てる。重慶から逃亡した阿壠は杭州にいた。彼は変名を使い、友人の伝手で何とか職に就いていたのだが、やがて国民党軍部内に起こる対立抗争の影響もあったのか、不思議にも本名陳守梅で南京の陸軍参謀学校に復帰し、階級も上がって大佐になっていた。この杭州・南京での生活に関わる資料にも、まだ明らかにないものが多い。阿壠は建国後、上海鉄道局公安部を経て天津文壇に異動し、人民共和国公認の文学者としての人生をスタートさせる。前述した阿壠批判はほとんど間髪を入れず展開したことになる。阿壠の厳しい後半生が始まったのだ。本章では阿壠批判の詳細を検証しながら、批判する側の非論理性、非合理性、そして強引で執拗な批判運動の展開を確認していく。また冤罪事件の進展と逮捕後の阿壠の姿を公開された資料と関係者の証言から、できる限り忠実に再現してみたい。

本論で詳述しているように、林希によって再現された公判の阿権の姿が友人たちの見た彼の最後だった。そのしつかりした足取りと頭を上げた表情は、課せられた罪への屈服を断固として拒み、ただ一人、誰にも頼ることなく、そして誰をも巻き込むことなく、自己の無罪を誇り高く物語っていた。獄中の阿権は時折絶食を続けて激しく抗議したという。そしてその頑固さは看守らに自殺願望とみられることもあったとも伝えられる。獄中の阿権に生命を絶つ誘惑がなかったかどうかは不明であるが、阿権は厳しく生の道を貫いていたに違いない。かくも厳しい生を支える思想、あるいは情念とは何だったのだろうか。本論はその深さに極力到達しようと試みた。

本論第一章、第二章、第三章で阿権の生涯が相当程度明確になってきたと言える。特に、阿権の実家の詳細な調査と阿権の青少年期における国民党地方組織との関係、黄埔軍官学校入学の状況とその後の影響、上海防衛戦で負傷後の移動の経路、とりわけ延安、西安、重慶、成都と複雑に移動した足跡の意義など、本論において初めて考察される内容である。さらに、「阿権」という筆名の由来も、本論における確認が初めての成果となろう。また阿権の自殺した若妻との深い愛情とその及ぼす影響の広がりも、様々な制約があるものの、現在到達し得る限界とも言える考察となっている。阿権批判から逮捕、そして獄中での阿権の孤独凄絶な日々に関する内容は、公刊されている回想の文章を駆使しながら、遺族から提供された証言の録音を踏まえて構築されており、今後の研究において極めて貴重な資料となる事は間違いない。阿権の歩んできた道は大きな迷路を思わせるものである。かなりわかってきたとはいうものの、まだまだ謎が残っていて、本書の叙述もまったく推測の域を出ない箇所がいくつもある。しかし推測とはいえず、いずれも当時においては起こりうる可能性が十分にある推測であり、今後のさらなる徹底的な検証が求められる内容である。

本論第四章と第五章は阿権文学の芸術性を確かめ、その文学史における正当な評価への基礎資料となる事を目指すものである。

第四章では阿権の長編小説「南京」について、執筆当初から発表までの経緯と原作者の死後二十年、原作の執筆後半世紀も経って、中国でようやく刊行されるまでの過程を詳らかにしつつ、「南京」の文学的な意義を検討していく。阿権の「南京」原稿は当時の重慶政府公認の文芸機関誌『抗戦文芸』長編小説公募において第一位に認められた傑作であったにも関わらず、出版を見送られた作品だった。中国での正式な刊行は半世紀後一九八七年の事であり、タイトルも『南京血祭』と改められ原稿の字数も半分ほどしか残されていなかった。これは阿権名誉回復後の記念的出版であったが、その刊行に至るまでには多くの友人たちの献身的な努力があったのだった。当該書は拙訳により、日本で『南京慟哭』と題して刊行されており、これが文学者阿権に関する日本における最初の紹介となった。本論では当時刊行不能となった複雑な経緯とその原因について、一つの推論が語られる。また「南京」の優れた文学上の到達度に関して本章で詳しく述べられる。阿権作品の戦争文学としての質的分析を通して、南京陥落を描いた他の作品との比較検討を進め、特に日本の石川達三、火野葦平の文学との比較を通して、南京

大虐殺の存在そのものを否定する論調に対して文学の立場からの反証を行う。阿権作品は当時もそれ以後も喧伝されてきた単純な抗日小説とは全く異なる文学として成立している。本論はその詳細な分析を多角的に行っている。さらに本論では、戦争の実際の悲劇と文学的叙述の問題に関して独自の考察を進めている。たとえば石川達三と阿権とはその作品において、南京陥落時の同一の場所・状況の描写があり、文学の対象とした事実が確かにそこで発生したことを示している。本章では原作における情報の入手先とその妥当性を検討しながら、二人の作家の直面した惨劇の質を確認していきたい。また火野葦平も含めて、戦闘の只中であつた作家の倫理性と宿命とを見つめていきたい。

第五章では阿権の詩論を概観し、阿権文学について現段階での総括を行う。阿権の詩論は一九五〇年の大著『詩と現実（詩と現実）』全三巻にまとめられているのだが、やはり刊行と同時に激しい批判にさらされ、ほとんど販売できないまま絶版となつてしまった。この不遇の大著には、阿権の詩への熱い思いが込められているばかりでなく、彼の文芸に対する揺るぎない思考と確信が論理的に述べられている。『詩と現実』は阿権名誉回復後に、いくつかのアンソロジーのなかにその中核的な論考が収められており、本書ではそれらを基本にしなが、阿権のそのほかの文芸評論、散文を確認していく。そのなかで阿権の詩論の柱ともいえるべき、詩人の表現としての詩創作と精神生活の完全一致の境地、表現されるべき内容と詩の技法の自然で必要な連結、政治と文学の不可分性、先駆者としての知識人の社会的意義などが明らかになつていくだろう。本章においては、特に阿権の詩に大きな影響を与えたタゴールの詩作との関連について、詳細な検討を行っている。

第四章と第五章の考察を通して、阿権の文学の高度な達成と豊饒な作品に対する評価が確認されよう。「聖者阿権」とは天津時代の阿権を表す言葉であるが、阿権の預言者のごとき先見性と深い自己犠牲の精神、そして抱いた理想への断固たる信念をすべて込めた適切な表現だと言えよう。これまで筆者の取材において、阿権について語ってくれた多くの人が口を揃えて言っていたのは、「誠実な阿権」、「阿権の真摯さ」、「一途な阿権」という言葉だった。彼はまことに惨たらしい死を孤独に迎えなければならなかったのだが、被せられたおどろおどろしい罪を生涯認めないまま、多くの友人たちの生存のために、そしてたった一人のわが子の安全のために、従容として死を迎えたのだ。

本論は阿権に関する筆者の調査と研究の成果を総括した一種の報告書であるが、結果的に阿権の人生と文学の果実をある程度まとめることができたかもしれないという意味で、「阿権評伝」と称しても許されるのではないかと自負している。現段階では中国内外を問わず、むろん日本においても、阿権個人をテーマにした評伝が刊行されていない以上、敢えて本論をその最初の試みとして世に出そうと思つた次第である。筆者が『南京血祭』を手にして翻訳を開始した時から、すでに四半世紀もの時間が流れた。この間、阿権に関して数篇の拙論を発表し、資料の調査報告の機会も作ってきて、二〇一〇年ごろからは阿権に関する総括的な文書の刊行を公言までしてきた。しかし本務先の関係で一年と刊行を引き延ばし、とうとう今年の夏を迎えてしまった。お会いしてお話を伺おうと思ひながら、校務の多忙にかまけて連絡をつけず

にいるうちに、世を去ってしまった方々も数多い。筆者の研究に寄せられた多くの方々の支援と激励を思うと、自責の念に駆られるばかりであるが、本論がこうした方々の残された想いに万分の1でも応えられたいへん光栄である。

本論では阿権文学から生命と愛情への深い想念とあまりにも哀しい人の宿命への洞察とを確認している。阿権にとって、民族や国家などもそうしたはかない存在の人間たちに与えられた宿命的な条件に過ぎなかった。こうした哀しみをもたらすものは何か、阿権にはこの問題を突き詰めようとするまなざしが感じられる。本論においては、阿権における超越的存在との魂の次元での対話の姿を再現しようとした。これは万物に神性が宿るとする伝統的信仰ではなく、自我を強く自覚するが故に見えてくる倫理的存在と自身との関係性であろう。本論では「聖者阿権」の意味を「殉道者」として考えた。生命を賭して、いや生命の重みを知り尽くしてなおそれを犠牲にしようとする精神、それは極限にまで高められた魂の境地だったのではないだろうか。

阿権が生涯をかけて追及した文学とは、一生懸命生き抜いていく、その真摯さから迸り出る言語芸術ということができるのでないだろうか。中国文学史においてその系譜を見るならば、魯迅、譚嗣同を繋いでまっすぐ李卓吾につながっている。阿権に見られる近代的インテリゲンチクスと自我の意識は、高度な人格の尊重と自律的な社会の構築が意識されてはじめてその輝きを放つものである。思えば、阿権が曲がりなりにも自由に創作を発表できたのは、抗日戦争の時代と共和国建国前後の数年に過ぎなかった。この事実の意味するところを見つめることこそ、中国研究に課せられた課題である。本論刊行の意義の一端は確実にここにある。

阿権の生涯については、本論によって初めて明らかになったことがかなりある。推測の域を出ない考察に関しても、できる限りの証明を試みてきた。本論の最も大きな意義は、自己満足的に言わせてもらえば、まさにここにある。後半の作品論に関しては、今次の刊行のために大幅に手を入れてはいるものの、基本的にかつて発表した拙論や大学での講義を基にしている。本論はこれまでの研究のまとめではあるのだが、今後なさねばならない課題が次々に現れてきている。文字通りの意味で、本論は阿権評価の第一歩に過ぎない。今後の研究の深化に本論が少しでも役に立つことがあるなら、望外の喜びである。